

2012年。今年はまず旧約聖書のルツ記を学んでいきます。4章だけの書ですが、福音の視点からともに読んでいくことができると思います。私が神学生として初めて講壇に立たせていただいた時に連続して語らせていただいた書です。若い時とは少し違った見方も出ているのではないかなと期待しつつ読んでいきたいと願っています。

### 1. その時代と背景

「さばきつかさが治めていたころ」(1節)とあります。直前の書の「土師記」の時代です。ヨシヤの後の時代にイスラエルを宗教的・政治的な指導者であった人々が土師です。紀元前1050～1200年ぐらいのことです。オテニエル、エフデ、ギデオ、エフタ、サムソンなどが土師としてあげられます。土師時代のどのあたりかはわかりませんが、飢饉がイスラエルの地を襲いました。かつてヤコブの時代にも飢饉があって、イスラエルの人々はヨセフが大臣を務めるエジプトに身を寄せたことがありました。

### 2. エリメレクの一家はモアブに疎開(1～3節)

①疎開 エリメレク(私の神は王という意味)はベツレヘムに妻のナオミ(喜び、楽しみという意味)と息子マフロン(病める者という意味)とキルヨン(消えうせる者という意味)とで住んでいました。ところが、飢饉がやってきて困り、ヨルダン川の東の地にあるモアブの荒野に疎開することになったのです。親類縁者がいたわけではなさそうです。どれだけの人々がこのような行動をしたかはわかりませんが、この一家は早速、故郷ベツレヘムを後にしたのです。「彼らはベツレヘム出のエフラテ人であった」(2節)とありますが、ヤコブの時代にはベツレヘムはエフラテと呼ばれていたのです(創世記35:19)。

②生活を始める(2節) なにしる、ユダヤ人から見れば、モアブは異邦人の地ですから心もとなかったことでしょう。どのようにして生活したのかはわかりません。ともかく必死になって働いたことでしょう。「オモニ」(姜尚中著)の中には日本の地に来て地べたを這うようにして働く両親の姿が描かれています。1900年初頭から始まったブラジル移民の人々は、想像を絶する現実の中に過酷な労働と低賃金の中で苦しみながら農地で働いたようです。慣れない外国の地で生活をするというのは大変なものだと思います。

③エリメレクの死(3節) それなのに、一家の大黒柱であるエリメレクは死んでしまったのです。病死だったのでしょうか。詳細は一切わかりません。ナオミと二人の息子達はその地に残されることになってしまいました。異国の地で過ごすナオミは大変だったでしょう。

### 3. 息子達の結婚と死(4～5節)

①息子達の結婚 エリメレクの死からどれだけたったのことなのかは明確ではありません。エリメレクとナオミがモアブの地に行った時に、二人の息子達はまだ子供であったのか。それとも、もう2～3年で成人するような年齢であったのか。それによって5～10年ぐらいの違いが出てしまいます。いずれにせよ、二人の息子達はモアブの女性と結婚することになりました。嫁たちの名前は、一人はオルパ(雌じかという意味)、もう一人はこの書の中心人物ルツ(友情という意味)でした。ナオミは幸せであったでしょう。「こうして彼らは約10年の間、そこに住んでいた」。というのは結婚して10年ということでしょうか。それともエリメレク一家がモアブに移り住んでからのことでしょうか。

②マフロンとキルヨンの死 こんなことあるのでしょうか。ナオミにとっては、頼みの綱である二人の息子達です。モアブ人の妻オルパとルツとの生活も軌道に乗り始めているような頃です。相次いで、この二人までもが命を落としてしまいます。これもまた病死だったのでしょうか。

③ナオミは ナオミは異国に一人残された感じです。確かに嫁二人がいてくれます。しかし、言葉、生活習慣も違う地で、彼女は一人残されてしまったのです。

#### 《結論》

ヨブとまでいなくても、ナオミの身の上起きた出来事は尋常ではありません。夫エリメレクの死に続いて二人の愛する息子達まで失うことになるのは、ただでさえ不慣れた地での生活であり、異教の地での生活です。経済生活においても精神的な生活においても、お先真っ暗な状態です。

しかし、ナオミがモアブの地に渡る時も、このような不幸を次々に味わった最中にも決して忘れていないものがありました。それはルツ記を続けて読んでいけばわかることですが、ナオミは唯一の神への信仰をしっかりと携え続けていました。嫁達にも影響を与えていました。ナオミはどのように祈り、またどのように生きてきたのでしょうか。

ナオミの信仰姿勢を一言でいえば、今年の姉ヶ崎キリスト教会の御言葉としてとりあげているローマ12:12の心ではなかったでしょうか。「望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい」。飢饉に遭遇した時、モアブに疎開した時、夫に先立たれた時、息子達が早世した時。どれもこれも患難です。耐えられないような試練です。しかし、アブラハムやパウロやヨブに宿させられた主にある希望がナオミにも与えられました。希望の光を見据えつつ、先に進み、患難に耐えさせていただいたのです。ナオミは、受け入れられない事態の中でも、主に頼り、絶えず祈り続けました。彼女が、生き続けました。一条の光を頼りにしつつ、試練の中にあるあなたにも、主は光です。